別紙２

審査の結果の要旨

論文提出者氏名：渡部　直也

この課程博士学位請求論文の審査は，（主査）田中伸一，（副査）西中村浩，伊藤たかね，深澤はるか（慶應義塾大学），安藤智子（富山大学）の５名によって行われた。公開審査は平成 30 年 12 月 16 日（日）13 時から，18 号館コラボレーションルーム 2 において行なわれた。論文題目は Sound Alternations in Slavic Languages（スラヴ諸語における音交替）である。以下，審査結果の要旨を報告する。

本博士論文は，主としてロシア語，ポーランド語，チェコ語、セルビア・クロアチア語，およびブルガリア語に焦点を当て，スラヴ諸語における音交替について普遍性と多様性の観点から，理論的・実証的に諸現象を解明することを目的としている。

本論文は，序論と結論を除き，４つの章から構成されている。序論の章では言語普遍的な特徴やスラヴ諸語固有の特徴を紹介しながら，本研究の目的，背景，未解明の問題や課題，依って立つ方法論や理論的枠組み，意義などを明らかにし，全体の章立てなどを導入している。具体的には，全体の理論的枠組みとして最適性理論(Optimality Theory)を採用し，言語普遍的な特徴もスラヴ諸語内の多様な特徴も，この理論により説明できる点を主張している。

第２章ではスラヴ諸語に見られる音韻現象を概観し，音韻体系にある程度の共通性・類似性が見られる一方で、いくつかの相違点も観察される点を浮き彫りにしている。たとえば，前舌母音による子音の硬口蓋化や，音節構造による出没母音の交替は共通して観察されるが，こうした交替を受ける，または引き起こす音は言語間で異なる。こうした音韻的相違に加え，交替現象によってはある言語固有の例外的に見える場合があり，一定の音韻条件下で生じるかどうか定まらない問題があることも示している。こうした音交替は音韻的観点だけでは説明できず、語種や形態に関する情報も重要であることを主張している。

第３章では，第２章で概観した諸現象を説明するのにふさわしい，妥当な音韻表示としての素性理論，妥当な枠組みとしての最適性理論を導入している。前者については，以前の生成音韻論では母音と子音それぞれに異なる種類の，二項対立の素性が仮定されてきたのに対し，本論文では近年の諸研究をもとに，母音と子音の調音特徴について同種の素性からなる統合素性理論を支持し，素性が欠如的（privative）でなければならない根拠を示している。一方，後者については，言語普遍的な制約が言語固有の優先順位で序列化されることで文法を捉える最適性理論をスラヴ諸語に応用することで，その共通性と多様性を説明できることを主張している。さらに，この枠組みにおける問題点となる不透明現象には「濁りの表示」を，音韻的に説明できない形態現象のうち生産的な現象には語彙の階層化を，形態素特有の現象は語彙的基底表示をそれぞれ仮定することで，この枠組みの問題点を解決できることも主張している.

第４章では，第３章で導入された統合素性理論や関連する制約を仮定した上で，最適性理論に基づいて，スラヴ諸語における音交替に関する詳細な類型分析・個別分析を展開している。ここでは純粋に音韻的な現象として硬口蓋化や母音弱化，生産的な例外現象と

して母音高段化や出没母音化や外来語借用，非生産的な例外現象としてある種の形態音素交替や母音前後交替や母音の長短交替を取り上げ，スラヴ諸語の広範な現象記述や一般化を行いながら，形式理論的分析を提案している。また，その際に問題となるスラヴ語間の共通性と多様性，不透明現象，例外現象について個別の分析提案を行うことで，主張する統合素性理論や最適性理論の分析の新しい証拠を提示している。

最後に，結論の章では全体を通しての主張が要約されている。つまり，１）スラヴ諸語間の音韻的類似性や変異性は最適性理論で捉えられること，２）不透明現象は「濁りの表示」を採用することにより，この枠組みで捉えられること，３）純粋に音韻的でない現象のうち生産的なものは語彙の階層化と各語彙層に特有の忠実性制約，生産的でないものは特定の形態素にのみ作用する基底表示や制約によって説明できること，などである。

本論文の評価として，その新しさや意義を挙げるなら，次のようにまとめられよう。第１に記述的な価値として，スラヴ諸語の交替現象に関する広範な現象記述を行い，共時レベルでの類型をこれまでになく明確にした新しい貢献がある．スラヴ諸語の音韻に関する歴史的記述や，個々の言語に関する現象記述は先行研究でも見られるが，ここまで広範な共時レベルの類型記述は他になく，その貢献は大きい。第２に理論的意義として，　分析の道具として採用した最適性理論について非常に深い知識を有し，スラヴ諸語の交替現象に関する精密かつ明晰な分析を提示できたことも，特筆すべき成果である。なぜなら，ここまで広範な共時レベルの類型記述は他になかったので，それに対応する理論的な類型分析もかつて存在しなかったからである。第３に，音交替に関する例外現象に新たな規則性を見出し，それを高度な理論的立場から説明を与えた貢献も大きい。音交替で規則性が見えない現象は例外として捨て置かれる場合が多々あったが，そこに規則性を見出して自然な説明を与えたことは，スラヴ語音韻論に新たな地平を拓くことになるだろう。

全体としては，理論と記述のバランスの取れた高レベルの独創的研究であると結論付けてよい。また，その広範な共時レベルの類型記述および分析は，スラヴ語音韻論や最適性理論はもちろん，スラヴ語学一般にもインパクトが大きく，重要な一石を投じることは間違いない。

このように記述的価値や理論的意義について高く評価された成果があった一方で，いくつかの問題点も指摘された。たとえば，１）研究論文として，今後の課題が明確にされておらず，どのような問題点や発展可能性があるのかが不明であること，２）現象記述に関して，その音声表記が不正確・不明確なところがあり，どれほど音声的または音韻的な異音なのかが不明な箇所があること，３）不透明現象に関して，基底形と表層形の提示の仕方や，仮定される理論の説明が不明瞭であること，４）例外現象の説明として，仮定されている語彙層に（扱われている現象とは別の）独立した根拠に乏しいこと，５）対象とするスラヴ諸語について，なぜその５つなのかの意図や必然性が説明されていないこと，などが挙げられた。これらはすべてもっともな指摘であった。

しかし，これらは全体の価値を揺るがすほどのものではなく，語彙層に関する独立の根拠は今後の課題として残るものの，論文自体の信頼性が損なわれるわけではない。総合的には，形式・内容ともに水準以上の力作であるとの審査員全員の合意を得たので，審査委員会としては博士（学術）の学位を授与するにふさわしいと認定する。